奈文研ニュース

No.48 Mar.2013

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.go.jp/

ミャンマーの文化遺産保護にかんする技術的調査

1960年代より軍事独裁政権が続いていたミャンマー（ビルマ）では、特に90年代以降、多くの西側諸国との交流が途絶え、文化遺産の現状についても十分に情報が伝わってこない状況が続きました。しかし、2011年３月の民政移管を契機として、こうした状況が一変し、国内外からの投資や開発の波が一気に押し寄せるようになりました。そうしたなかで、文化遺産についても再び脚光があたるようになりました。

多民族国家であるミャンマーには、有形・無形の多様な文化遺産が存在します。特に、同国中部に位置するバガンは、エーヤワディー（イラワジ）川の岸の平野に数千ともいわれる仏教建造物が点在する幻想的な景観で、世界的にも有名です。しかし、ミャンマーには今現在、ユネスコの世界遺産一覧表に記載された遺産は一つもありません。つまりこの国の文化遺産は、まだまだ世界に広く知られていないともいえます。また、近年の急激な経済発展にともない、この国の文化遺産を適切に保護するにはどうするべきかを考えることも急務となっています。

そこで奈良文化財研究所は、文化庁による「平成24年度文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）」により、2013年１月26日から２月３日にかけて７名の所員（考古学５名、保存科学２名）をミャンマーに派遣し、同国の文化遺産関係当局者らとの面会・情報交換、および各地の遺跡・博物館の実地調査（ヤンゴン、ネピドー、バガン、ベイダノー、ピュー、シュリクシェトラ）を実施しました。

荘厳されたシュエダゴォン・パヤー（ヤンゴン・15世紀）

実は奈文研では1994～1998年度にかけて「南アジア仏教遺跡保存整備にかんする基礎的調査研究」を通じて、ミャンマーとの共同研究を実施し、人的交流および現地調査をおこなってきた経緯があります。不幸にも政治状況の変化によりその交流は一時途絶えてしまいましたが、例えばこの間に奈文研で研修を受けた専門家が、その後同国で指導的立場に就く等、当時まいた種は確実に根付き、花開いてきました。今回の交流の再開は、まさに「遠い友人との再会」でした。

現地を訪れて感じたことは、文化遺産の理解や哲学について日本と大きく異なる点はあるものの、その違いを尊重することが重要だということです。例えばミャンマーでは歴史的な仏像や仏教寺院であっても、修復してきれいな状態にし、あまつさえ電飾やネオンをつけて装飾したりもします。そうした感覚は日本人とはまったく異なるものですが、何百年も前の文化遺産であっても、彼らにとっては今日でも信仰の対象であり、だからこそ荘厳するのです。つまり彼らにとって遺跡は「生きている遺産」でもあるのです。

こうした違いを尊重しつつ、国際的に承認された基準による文化遺産保護に必要な技術的支援を、奈文研として提供していくことができれば良いと考えています。　（企画調整部　石村 智）

王宮跡とシュエグーチー寺院（バガン・12世紀）

発掘調査の概要

藤原京左京二条三坊・三条三坊の調査（飛鳥藤原第173-1次）

本調査は水路改修の事前調査で、調査区は南北118mにわたり、東二坊大路と二条大路の推定位置にあたります。現代の水路による攪乱（かくらん）が著しかったものの、南北溝1条、土坑4基を確認しました。

今回見つかった南北溝は、埋土から古代の遺物が出土していることから、東二坊大路東側溝の可能性があります。東西道路である二条大路については、北側溝推定位置は現代の水路で攪乱を受けていました。南側溝推定位置では、調査区西壁で観察が可能でしたが、東西溝は確認できませんでした。このことから、二条大路南側溝は、東二坊大路を横断しない可能性が高いといえます。

この他、4基の土坑は、出土遺物より古墳時代前期の遺構であることがわかりました。互いに離れた場所に位置し、狭長な調査区である等の制約がありましたが、当該期に調査区周辺で土地利用があったことがあきらかとなりました。

また、現代の水路は、正方位から多少振れているものの、ほぼ南北方向に直線的に流れており、条里の境にあたります。このことから、東二坊大路東側溝を踏襲した南北溝が古代以降、近現代に至るまで、少し位置を変えながらも使用されていた可能性が認められます。　（都城発掘調査部　木村 理恵）

調査区全景（北から）

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第174次）

2012年4月から開始した藤原宮朝堂院朝庭の調査は、12月17日に埋め戻しを完了しました。調査面積は1,850㎡で、延べ8カ月にわたる調査でした。今次調査の成果をまとめると次のとおりです。

大規模な整地と建物群　2012年4月から6月にかけての調査では、調査区のほぼ全域で、藤原宮期の礫敷（れきじき）を検出しました。7月以降、調査区の南3分の1の範囲で礫敷を除去し、上層の整地層である第二次整地土を段階的に掘り下げたところ、掘立柱建物、柱列、溝、穴等を検出しました。掘立柱建物は調査区の西南部分で多く見つかり、昨年の第169次調査で検出した建物と近接しています。これらの建物群は、重複関係から建て替えがあったことがわかります。いずれも藤原宮の造営にかかわる仮設の建物群であったのでしょう。

沼状遺構と木屑だまり　調査区の北辺付近では、これまでの発掘調査で確認してきている沼状遺構の範囲を探るべく、9月以降に断割（たちわり）調査をおこないました。その結果、沼状遺構は調査区の北辺付近に南端があり、これより北側に広がっていることがわかりました。また、調査区東北部では、礫敷面が楕円形に落ち込んでいる部分を確認し、その落ち込みの断割調査をおこなったところ、下層に多量の木屑が堆積していることが判明しました。木屑は整理箱で180箱におよび、宮造営時の木材加工で生じたものとみられます。今後は木屑の分析等を通じ、宮造営過程の実態解明に役立てたいと思います。

（都城発掘調査部　森川 実）

調査区全景（北東から）

薬師寺食堂の調査（平城第500次）

奈良文化財研究所では、9月下旬から薬師寺食堂の発掘調査をおこなっています。食堂は、過去数回にわたり近畿大学や奈文研によって部分調査がされていますが、今回は、法相宗大本山薬師寺がすすめている食堂再建事業にともない、その全容を解明すべく、全面を発掘調査対象としました。調査面積は約1,300㎡です。

食堂といえば、現在はダイニングルームやレストランのことを指しますが、古代寺院においては僧侶が食事を摂るだけでなく、経を読む等修業の場でもありました。その際には僧侶が一堂に会するために、一定の人数が収容できる大きさの建物が必要です。薬師寺の堂宇のなかでは、大講堂がもっとも大きな建物ですが、食堂もそれに負けないくらいの規模がありました。

薬師寺食堂の正確な創建年代は不明ですが、金堂や講堂、東塔等と同じく奈良時代前半に建てられたとみられます。しかし、天禄4年（973）に北側に隣接する十字廊から出火した火災で焼失してしまいました。建物は寛弘2年（1005）に再建されましたが、その後、食堂にかんする文献史料は見当たらず、江戸時代前半までには廃絶したと思われます。

発掘調査では、食堂の基壇を現地表面下30～80㎝のところで検出しました。基壇の築成には、瓦を含む土で整地した後に、地盤を堅固にするために土と砂とを互層に積み上げてつき固めた、版築という工法が用いられています。礎石はすべて抜き取られていましたが、礎石抜取穴を検出しました。興味深いことに、食堂の基壇本体の版築は比較的粗いものでしたが、そのかわりに礎石下部分のみをピンポイントに掘り込んで、粘土と土と瓦を互層に入れ、丁寧な版築をおこなっていました。この工法は壺地業と呼ばれ、薬師寺では中門でもみられます。そのいっぽうで、金堂や講堂では、基壇全面に丁寧な版築を施しており、建物によって違いがみられます。食堂造営の際には建物の重量がかかる礎石下のみを特に強化するという効率的な手法が選択されたことがわかります。また、基壇外装の一部である地覆石や階段の下部（いずれも凝灰岩製）を検出しました。階段は、基壇南面に中央と東西の3カ所に設けられていました。さらに基壇周辺では、石組の雨落溝と石敷を検出しました。これらは特に南面で残りが良く、一部後世に壊されているものの約40mにわたって確認することができました。

これらの成果により、薬師寺食堂は桁行11間、梁行4間の礎石建物で、基壇は、東西が約46.8m（158尺）、南北が21.6m（73尺）の規模であることが確定しました。また、壺地業内で出土した瓦や土器の年代から、遅くとも奈良時代前半には造営が始まっていたことや、食堂の廃絶後に、基壇を壊して土坑が掘られており、そこから出土した土器の年代から、14世紀初頭までには食堂が廃絶したこともわかりました。

これらの調査成果については1月26日におこなった現地説明会で報告し、寒い中、714名の方にお越しいただきました。また、お寺のご好意で発掘調査成果を報告する場として、東僧房をお借りしました。今回の発掘は、奈良時代における薬師寺食堂の具体的な様相が判明し、発掘調査事例の少ない古代寺院における食堂の様相を知るうえでも貴重な調査となりました。　（都城発掘調査部　石田 由紀子）

調査区全景（北西から）

基壇南辺で検出した階段や石敷、雨落溝（東から）

坂田寺出土地鎮具

坂田寺の第５次調査で検出された土坑SK160は、８世紀後半に建立された伽藍中枢の建物SB150の北東に位置し、後世に削平された８世紀後半の基壇建物の地鎮遺構と推定されます。SK160からは、土師器（はじき）・須恵器（すえき）等の土器類の他、佐波理鋺（さはりわん）、銅銭、銅鈴、金箔等の金属製品、琥珀玉・ガラス玉等の玉類が出土しました。

出土した銅銭は全部で291点であり、和同開珎、萬年通寶、神功開寶の３種に加えて、唐の開元通寶１点があります。いくつかの銭貨に植物の可能性がある繊維痕跡が残存しており、一部で撚りの痕跡を観察しました。発掘時には銭貨がいくつかのまとまりで土坑内に散在しており、もとは紐で通した緡銭（さしぜに）の状態で埋納されていた箇所があったと考えられます。また、平織りの組織が付着した銭貨もあることから、これら銭貨が布で包装されていた可能性もあり、緡銭以外の埋納形態も想定することができます。

土器類はいずれも小型品で、写真の須恵器は平瓶と呼ばれる器種です。外表面に自然釉がみられ、かたちや製作技法等から、猿投窯（さなげよう）（現在の愛知県）の製品ではないかと考えられます。

奈良時代前期に唐からもたらされた『陀羅尼集経（だらにじっきょう）』には、仏堂建立にあたり、基壇内に七宝（金・銀・真珠・珊瑚・琥珀・水晶・瑠璃）と五穀（大麦・小麦・稲穀・小豆・胡麻）を埋納する作法が記されています。SK160からも、金箔、琥珀、ガラス玉が出土しており、本遺構の地鎮め供養もこれに基づいている可能性があるでしょう。

（都城発掘調査部　木村 理恵）

写真は平瓶・銅銭ともほぼ実物大です。

日韓発掘調査交流に参加して

奈良文化財研究所は韓国国立文化財研究所との研究交流協約書にもとづき、国立慶州文化財研究所と発掘調査交流合意書を取り交わしています。私はこの発掘交流のため、2012年9月3日から11月2日まで韓国慶州市に滞在し、新羅支配者層の墓群であるチョクセム古墳群、新羅の王都である新羅王京遺跡、そして統一新羅の代表的寺院として著名な四天王寺跡の調査に参加しました。

積石木槨墳（つみいしもっかくふん）という新羅独特の墓制に特徴をもつチョクセム古墳群41号墳、建物や塀の跡が増改築をともなって複雑に展開する新羅王京遺跡、いずれも私にとっては難解そのものでした。それでも、調査スタッフの方々の説明をうけ、様々な作業をこなすうちに、自然と体が遺跡に馴染んでいくような感覚をおぼえたことが思い出されます。これは遺跡の見学だけでは決して味わえないことです。四天王寺跡では、亀趺（きふ）（亀形の石碑台座）の調査に参加し、亀趺周囲の構造物を調査スタッフと議論を尽くしつつ検出できたことが、交流を通じてのもっとも貴重な経験となりました。

こうして発掘交流生活に慣れていくうちに、発掘調査の基本的な考え方や方法に大差はなくとも、調査過程の個別的状況への対応やその手順等、細部には多くの違いがあると感じました。それらは一長一短、文脈による善し悪しにも思えます。しかし、私たちが発掘現場で当然のごとく考えている事柄を、新鮮な気持ちで見つめ直す機会を得たことは、私にとって最大の収穫であったと思っています。

発掘交流で学ぶことは人それぞれですが、それはこうした機会があってのこと。今後も発掘交流が続き、日韓の研究交流に重要な役割を果たしていくことを願っています。（都城発掘調査部　森先 一貴）

新羅王京遺跡での実測作業

文化財担当者研修「古文書歴史資料調査管理基礎課程」の開催

2013年1月15日から18日の4日間、奈良文化財研究所の文化財担当者研修として、「古文書歴史資料調査管理基礎課程」を開催しました。

従来は奈文研の研修は埋蔵文化財が対象でした。しかし、近年は建造物や庭園等も扱うようになりました。そこで今回は伝世文化財にまで対象を広げて、古文書・歴史資料の研修を実施してみました。

初めての試みで、応募があるかどうか心配しましたが、定員の3倍にもおよぶ応募をいただきました。全員は受け入れきれず、最終的には19名の方に受講していただきました。内容は、未整理の文書を実際に調査したり、奈良国立博物館の修理所・山城郷土資料館を訪問して修理・古文書調査の現場を見学したり。また、文化庁の地主智彦さんのお話しをうかがったり。古文書の専門家でなくても、何ができるのか、ということを考えながらの研修になりました。

文化財を扱う組織でも、古文書の専門家がいない組織も多いと思います。しかし、古文書等の伝世文化財は、行政への問い合せも多く、必ず対応しなければならない分野です。我々主催者側も、各機関がそのような問題を抱えながら、個々の担当者ががんばって対応している実態を知ることができました。しかし、そのいっぽうで、今回は研修参加を希望されながら、参加できない方も生じてしまいました。古文書・歴史資料をはじめとする伝世文化財について、担当者同士が交流し、情報を交換しあう場が、もっと必要だと認識した次第です。今回の経験を生かして、今後もこのような機会を設け、古文書・歴史資料をはじめとして、文化財行政を幅広く充実させる必要がある、と思いを新たにしています。

（文化遺産部　吉川 聡）

古文書調査の実習

退職にあたって

「アブラカダブラ」だか、「アブラブ」だか、何だかわからないのだが、近頃奈良文化財研究所にはどうやらこんな名の仲間が生まれたらしい。言割っておくが他人に迷惑をかけることのないいたって善良な同好の仲間らしい。どうも「明かり」をテーマにしていて、考古・文献・庭園・分析科学といった異分野の研究者からなり、日本列島ばかりか韓国や中国にも同志がいて、きわめて学際的かつ国際的である。いかにも奈文研らしい研究の芽である。私の知るところ、奈文研にはこのような芽がいくつも育っている。そしてこの明かりの芽には石灯籠の職人さんにも仲間の輪が広がっている。何時の日かこの小さな灯芯に、明るく暖かい火が灯ってほしいものだ。

平成24年は奈文研創設60周年の年にあたり、これを記念した企画に「奈文研親子教室」があったのをご記憶の方も多いだろう。これは夏休みの企画で、奈文研探険ツアー（平城編、藤原編）と染色体験とがあった。本番当日は、真夏の太陽が容赦なく照りつける暑い日だったことを今もよくおぼえている。

それから秋が来て11月初旬に、小さな僕とお母さんが奈文研に私を訪ねてきてくれた。少年の態度から訪ねようとしたのは、少年の方であることがすぐにわかった。そして彼は、そう勇気を振り絞って「お楽しみ会に来てください」と一息に大きな声で言ってくれた。お母さんが、少年と奈文研探険ツアーに参加したこと、お楽しみ会は幼稚園の企画であることを話してくれた。たしか復原なった大極殿を探険している時に、「僕の幼稚園がここから見える」と教えてくれた男の子がいた。今春に小学校に上がるその少年が、今も夏の企画を忘れないでいてくれたことを知ったその刹那、皆の努力でなった夏の奈文研企画は大成功であったことを知った。

染色に使った藍には、その後秋になって花壇で白い上品な花が咲き、初冬に結実した。その種子についてホームページのほかに新聞に掲載され、北は青森から南は福岡まで、種子希望の電話がきてお送りした。きっと今年の春には日本の各地で家族で藍の種子を撒き、可愛い芽が出て、梅雨時の雨を吸って大きく育ち、間違いなく真夏の青空色が染まるだろう。藍は、強くて、そして美しいのだ。

（副所長　深澤 芳樹）

奈文研での30年

奈良の記憶は、小学生の頃、幾度となく父母に連れられて訪れた平城宮大極殿の土壇や周囲の田んぼで、瓦の破片を拾い集めたこと、飛鳥寺や石舞台等、不便なバスを待って巡ったこと等様々だ。高校生の頃、進路をきめるのに、いくつもの夢の中、一つあきらめ、またあきらめしているうち、考古学しか残らなくなった。関西では面白くないので、わざわざ入学した東北大学では、旧石器研究が主流で、最初、前期旧石器を志したが、辛くも逃れ、捏造事件の外に留まることができた。たまたま発掘に参加した縄文貝塚で、貝殻と共に出土するシカやイノシシの骨を見た時、縄文時代の食料残滓（ざんし）、つまり遺跡の生ゴミの研究から、社会全体を復元しようと閃き、そのまま一生のテーマとなった。

しかし、日本の考古学は文学部に属し、動物骨について基礎から学ぶことができず、米国に留学して学んだ。学生時代は、石器時代の貝塚にしか興味がなかったので、自分自身、奈良文化財研究所に就職することになるとは、その直前まで予想もしていなかった。人生万事塞翁が馬、とはよくいったもので、東北大学在籍が10年を迎えようとした頃、奈文研の埋蔵文化財センター研究指導部長だった佐原真さんに誘われて奈文研を受験し、幸い合格することができた。

奈文研に来てからは、2年間、平城宮の発掘を手伝っただけで埋蔵文化財センターに移り、そこで専ら動物考古学・環境考古学の研究に専念させてもらった。奈良に来ると縄文貝塚ははるかに遠く、見るのは牛馬の骨ばかり。佐倉市の大作古墳群から馬具を装着した馬が出土した際、大化の薄葬令（はくそうれい）で禁止された、亡き人の馬の殉殺だったことをあきらかにできた。大阪府城山遺跡の奈良時代の溝から出土した馬の解体痕と、脳髄の摘出痕から、養老厩牧令（ようろうくもくりょう）の官馬牛が死なば、「皮脳角胆」を収めよ、という記載と合致し、延喜式の鹿皮を鞣（なめ）す際に脳を和えとする記述から脳漿鞣（のうしょうなめ）しに思い至り、慶州でも類例を見つけた。奈文研にいたお陰で、その後も粟津湖底遺跡、原の辻遺跡、真脇遺跡、東名遺跡等、数々の重要遺跡の発掘にかかわり、自分自身の研究法を実践できたことは、研究者冥利に尽きると感謝している。

（埋蔵文化財センター長　松井 章）

飛鳥資料館 春期特別展「飛鳥寺2013」

飛鳥大仏

飛鳥寺は、『日本書紀』によると崇峻天皇元年（588）に造営が開始されたとされる日本最初の本格的な寺院です。飛鳥寺建立は、仏教伽藍の建設にとどまらず、宗教・政治・文化・思想・美術・建築・技術等あらゆる面において当時きわめて重要な意味を持ち、日本古代史の一大画期でした。

この飛鳥寺の発掘調査をおこなったのは、半世紀以上も前の1956年～1957年のこと。そして、その時の出土品や『元興寺縁起』をもとに、飛鳥資料館では1986年に「飛鳥寺」展を開催し、多くの方々にご来場いただきました。

その後、飛鳥寺にかかわる調査や研究に様々な進展がありました。今回、「飛鳥寺2013」展として「飛鳥寺」展以降の新研究の成果と、奈文研が飛鳥寺の発掘調査をおこなった際に残した記録類の展示を企画しました。

今回の展示によって、飛鳥寺建立の意義と、その遺構や文化財を残してきた飛鳥の風土について思いをはせていただければ幸いです。　（飛鳥資料館　成田 聖）

会　　期：2013年４月26日（金）～６月２日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで、年末年始・月曜休館）
ホームページ：http//www.nabunken.go.jp/asuka/index.html　お問合せ：☎0744-54-3561（飛鳥資料館）

平城宮跡資料館 春期企画展「発掘速報展 平城2012」

発掘調査をするとき、調査員は何を考え、どんなふうに遺跡を解明しようとしているのか、ご存知ですか？今回の発掘速報展は、そんな研究員の「思考回路」そのものを披露する展示です。

想定外の遺構の出現に驚き、５次にわたる調査の度に検討を重ねていく「平城京三条一坊一・二坪」の調査、今までの伽藍内の調査や文献史料と照らし合せながら推察していく「薬師寺食堂」の調査、小規模な発掘調査成果を蓄積していき、周辺一帯の様相解明に役立てる「法華寺周辺の調査」…と、今年度発掘した３ヶ所の調査の様々な思考のようすを紐解きながら、それぞれの遺跡をご紹介します。

是非、展示会場にお越しいただき、「発掘調査員の頭の中」に飛び込んで、一緒に遺跡の謎を解く旅に出てみませんか！　（企画調整部　渡邉 淳子）

会　　期：2013年３月16日（土）～６月２日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで、月曜休館）
ギャラリーイベント：会期中毎週金曜14：30から（５月３日除く）
研究員による展示解説やクイズ大会　※詳細はホームページに掲載
ホームページ：http//www.nabunken.go.jp/heijo/museum　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

■　お知らせ

飛鳥資料館 写真展
2013年３月９日（土）～４月14日（日）
第３回写真コンテスト
「神々の山―大和三山のある風景―」

平城宮跡資料館 春期企画展
2013年３月16日（土）～６月２日（日）
「発掘速報展　平城2012」

飛鳥資料館 春期特別展
2013年４月26日（金）～６月２日（日）
「飛鳥寺2013」

■　記　録

文化財担当者研修
○古文書歴史資料調査管理基礎課程
2013年１月15日～18日　19名
○文化的景観調査計画課程
2013年１月21日～25日　11名
○生物環境調査課程
2013年２月13日～21日　５名
○保存科学Ⅳ（遺構・石造文化財）課程
2013年２月25日～３月１日　10名

現地説明会
○平城第500次発掘調査（薬師寺食堂）
2013年１月26日　714名

飛鳥資料館 冬期企画展
2013年２月２日～３月３日
「飛鳥の考古学2012」　1,355名

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp/
Ｅメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2013年3月